



写真_1 宮本さんの登場には、会場からひととき大きな声援が送られた。大技が決まるたび観客は大興奮。写真_2 レスラーたちが観客席に乱入して、お客さんを追いかけて回すことも。客席はリングにも近く、会場は終始大歓声に包まれた。写真_3 「信頼できるメンバーに声を掛けました」と宮本さん。吉和での熱い試合を繰り広げたレスラーの皆さんに大きな拍手が贈られた。

BJW認定デスマッチヘビー級王座 宮本裕向さん、 吉和に3度目の凱旋――



プロレスラー
みやもと・ゆうこう
宮本 裕向さん
(32歳・吉和 田中原出身)

Profile
175cm、90kg。平成13年に特攻服を身にまとってヤンキーレスラーとしてプロデビュー。暗黒プロレス組織666(トリプルシックス)所属。現在、BJW認定デスマッチヘビー級王座を二度防衛中。2児の父。



吉和で行うことに 意味がある

11月9日、入場テーマ曲の「One Night Carnival」が流れると、会場の「もみのき森林公園体育館」が揺れた。500人を超える観客で埋まった体育館。吉和出身のプロレスラー宮本裕向さんの凱旋試合。今回で3度目だが、今回は宮本さん一人で企画から営業まで全ての段取りを行った。「この試合は、1年で一番大事な試合。吉和出身の自分が、吉和でプロレスを行うことに意味があるんです」宮本さんはそう強調する。

プロレスに興味を持ったのは高校1年生のとき、お正月につけっぱなしだったテレビで偶然観たプロレスの試合だった。「ものすごい衝撃を受けまし

た。プロレスってこんなに人を喜ばせることができるのかと。素直に、職業としてカッコいいと思いました」。

その後、建築関係の仕事に就いたが「お金ではなく、心から打ちこめるものを作りたい」と思い悩んでいた時にプロレスを思い出す。もともと運動が得意だったという宮本さん。「やっぱり人前に入る仕事をやりたかった」と20歳のときに一念発起し、プロレスラーへの道を決意。3カ月練習して受けた入門テストに見事合格し、関東に拠点を移した。通常は、入門してもデビューへの道は遠い。しかし、宮本さんは異例の4カ月という速さでデビューを決めた。体づくりや練習は過酷だったが、後戻りはできないという強い意思と覚悟で臨んだ結果だった。

プロレスの魅力は、 会場が一つなること

以前暴走族に入っていたことから、特攻服を身にまとう「ヤンキーレスラー」としてさまざまな団体に参戦した。現在は、暗黒プロレス組織666(トリプルシックス)に所属し、海外興行も含め、年間約200試合をこなす。

今年6月にはBJW認定デスマッチヘビー級王座に返り咲き、現在2度目の防衛を果たしている。今やプロレス界のスターとなった。

有刺鉄線や蛍光灯、高台を使った試合もあり、常に危険と隣り合わせのプロレス。「人ができないことをやる場所がおもしろいですね。プロレスは見に来てくれるお客さんがいて初めて成り立つもの。お客さんと一体となって盛り上がる試合が一番楽しいです」。デビュー当初は、応援に駆け付けた知り合いの声援も耳に入

らないほどだったが、今はその声援が何よりの励みだという。

地元を誇りに思っている 今後も盛り上げたい

吉和中学校に通った宮本さんは、「やんちゃで元気な中学生でした」と少年のような笑顔のぞかせる。いつも怒られていたため、何かあると「また宮本だろ」と言われた。しかし、自分がやっていたいなくても、丸くおさまるならばと、進んで悪役を買って出たこともあったという。「吉和は自分のふるさと。盛り上げていきたい。今後も定期的にこの吉和でプロレスをやりたいと思っています」。チャンピオンとなった32歳は、目を輝かせる。

今は東京で、妻と6歳、4歳になる二人の娘に囲まれた生活を送り、布団の上で父の真似をして遊ぶ光景に目を細めている。「東京は便利すぎて、何もかもがこの吉和と正反対の暮らしです。皆さんが言ってくれる『おかえり』という言葉に全てが詰まっているような気がします。人の温かさだったり、地域のつながりだったり、この吉和を誇りに思っています。今後も吉和を盛り上げ、吉和の良さをもっと広めたいと思っています」。